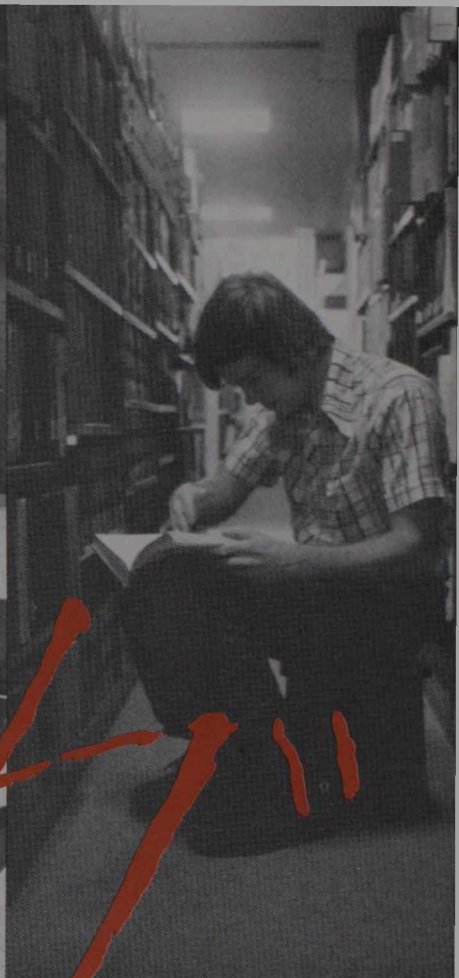


CA1  
EA947  
B71  
#34 Mar. 1981  
DOCS



カナダ

カナダ教育特集


1981年3月  
No.34

EXTERNAL AFFAIRS  
AFFAIRES EXTERIEURES  
OTTAWA  
APR 28 1981  
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

トピックス	2
カナダの大学教育・ジョン・セイウェル	4
私のカナダ留学・原孝一	5
私のカナダ留学・飯塚恭子	6
日本の大学院生に奨学金	8
カナダの初等・中等教育・関口礼子	10
カナダへの語学留学	11
トロントの小学生・川上美智子	12
カナダ大使館新着図書	13
日系新聞を読む・平野敬一	14
カナダ史点描・バイキングのカナダ発見	15
カナダ人の発明発見 (IX)	16
読者欄	16
編集後記	16



Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

## 最終段階に入る 下院の憲法論議

トルドー首相が昨年十月議会上程した「英国領北アメリカ(BNA)法」のカナダ移管と人権憲章の制定を求める決議案は、上下両院憲法問題特別委員会の報告書が二月十七日に提出されたことにもない、下院における最終論議が始まった。

「英国領北アメリカ法」は、一八六七年にカナダ連邦を発足させた法律で、英国議会によって制定された。一九三一年にカナダの主権が完全に認められたが、憲法修正の方法についてカナダ国内で中々合意が得られないため、同法はカナダの要請により英国議会の手に残された。そこで、トルドー首相は、この変則的な形を廃止してカナダで同法が修正できるようにする、すなわち同法のカナダ移管を提案した。同時に、これまで認められていた諸権利に、すべての連邦機関における英仏両語の平等性と英語もしくはフランス語で教育を受ける権利の保障などを加えた権利憲章の条文化も提案している。

決議案の提出後、下院で論議が開始され、上下両院特別委員会の設置となった。上院議員十八人、下

院議員十五人からなる特別委員会は、千人近くの個人、三百のグループから意見を聴取し、審議を重ねた結果、原住民の諸権利の条文化、憲法会議への原住民の参加、非再生天然資源の開発、保護、管理に関する独占的州権の条文化などを修正事項として承認した。

## 「六月のユリ」が課題図書に

カナダ在住の児童文学作家ハーパー・スマッカーさんの著書「六月のユリ」(ぬぶん児童出版刊、いしみつる訳。原名「Underground to Canada」)が、第二十六回青少年読書感想文全国コンクール(全国学校図書館協議会、毎日新聞社共催)の課題図書に選ばれ、好評を博している。

この本は、一八五〇年代に二人の黒人少女が米シシッピーの農園から、逃亡奴隷を助けてカナダへ送る地下組織「地下鉄道」に参加した人々の献身的な協力を得てカナダにたどりつく、苦難の旅を描いた感動的な物語である。

## 海底資源開発技術展を開催 六月にハリファックス

カナダ東海岸沖では、一九七九年以来相次いで海底油田やガス田

が発見され、経済的大発展が期待されているが、この東岸のノバ・スコシア州ハリファックスで、六月二十二日から二十四日まで、海底資源の探査、開発、採取、精製、輸送、マーケティングなどに関する最新技術の展示と技術交流会議が開かれる。

「カナダ海底資源博覧会(CORE)」と称するこの催しには、二百以上のメーカーが新鋭機器を展示することになっており、世界各国の政府・民間から石油工学、地質、化学工学、物理探査、海上建築、海洋工学、電子工学などの専門家やその他の石油開発関係者約五千人が出席するものとみられている。

## カナダ炭の対日商談相次ぐ BC州のクインテット社など

カナダと日本の間で、石炭供給に関する大型商談が相次いでいる。まず一月末には、ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバーのクインテット・コール社およびバンクーバーのテック・コーポレーションが日本の鉄鋼業界に対し、一九八三年から十五年間にわたりそれぞれ年間六百万トンおよび百七十万トンの原料炭と一般炭を供給する契約を結んだ。輸出総額は七〇億から八〇億ドルと想定されている。

この契約により、BC州北東部に世界最大の原料炭炭鉱が開発されることになり、カナダ連邦政府、

BC州政府では約七億ドルをかけて鉄道や大型港湾施設の建設を進める計画だと報じられている。

またオンタリオ電力公社に年間二百万トン、西ドイツに年間約五十万トンの火力炭を供給しても、エドモントンのラスカー社でも、日本のセメント会社や電力会社と長期契約を結び、火力炭の輸出を開始した。供給量は段階的に増加され、一九八三年末には年間百万トン台に達することになっている。

さらに三井物産と鉄鋼七社は、アルバータ州グレッグ・リバー地区で原料炭を開発する一億八千万ドルのプロジエクトに資本参加する商談をまとめた。日本側は開発費の四〇パーセントを負担し、二百十万トンの原料炭を引取ることになっているという。

## 七月から「カナダ現代美術展」

過去八〇年間のカナダの美術作品約百点を集めた「カナダ現代美術展」が、東京国立近代美術館(七月九日～八月二日)を皮切りに、北海道立近代美術館(八月二十九日～九月二十日)、大分県立芸術会館(十月一日～同二十八日)で開催される。

作品は、トム・トンブソン、アルフレッド・ペラン、アレックス・コルビエリユ、マイケル・スノーなど、いずれも第一流の美術家の代表作で、カナダ国立美術館などに展示されているものばかり。展示会は特に東京国立近代美術館と朝

日新聞社の尽力で実現した。

工業製品の輸入増大を要請  
グレイ大臣が田中通産相に

田中通産大臣は、一月十二、十三の両日カナダを訪れ、グレイ通商大臣、マケツカン外務大臣、ラロンド・エネルギー・鉱山・資源大臣らと会談した。



グレイ、田中両大臣

グレイ・田中会談では、グレイ大臣がカナダの工業製品の対日輸出に若干進展があったことを評価しつつも、「日本はわが国に工業製品を売っているが、カナダの対日輸出はほとんどが天然資源。カナダの対日輸出額の三パーセント弱しか最終製品はない」として、輸出品の内容に不満を示した。

同大臣は、対日輸出に工業製品および加工度の高い資源の割合が増えることをカナダは重視している、またカナダはCAN DU炉などいくつかのユニークな技術をもっている、と述べた。

これに対し、田中大臣は日本政府はCAN DU炉の技術的側面について研究を始めている、と語った。

グレイ大臣はまた、日本は日本電信電話公社の調達に関する対米合意を非差別的に適用する、との田中大臣の確約を歓迎した。同大臣は、さらに、日本政府は自動車業界に対しカナダへの輸出を自粛させて欲しい、北米および世界市場で売られる日本製自動車にもっとカナダ製部品を使って欲しいと要請した。大臣は、カナダ政府がカナダ製部品の対日輸出を拡大し、日本の自動車メーカーがカナダに工場進出するよう希望していることもつけ加えた。

田中大臣はこれらのカナダ側の要望に理解を示し、日本の自動車業界に対し前向きに対応するよう奨励すると述べた。

両大臣はまた日加資源加工実務委員会の設置を確認した。その第一回会議は二月、東京で開かれた。

### 四月にケベック州議会選挙 オンタリオは保守党が再選

ケベックのレベック州首相は三月十二日、州議会を解散し、四月十三日に選挙を行うと発表した。解散時の議席は、ケベック党六十七、自由党三十四、ウニオン・ナシオナル五、無所属二、欠員二だった。これに新たに五議席が追加される。

四年半前の前回の選挙ではケベック党が圧勝し、昨年五月ケベックの「主権・連合」に関して州民投票を実施したが、州民の支持を得られなかった。

なお、三月十九日に行われたオンタリオ州の州議会選挙は、一九四三年以来与党の座を占めてきた進歩保守党が百二十五議席のうち七十議席（前回は五十八）を得て勝利を収め、デイビス首相が引続き政権を担当することになった。

### 日本でもカーリング熱 東京と北海道でクラブ発足

冬のスポーツとしてカナダで人気の高いカーリングを日本でも普及させよう——と、東京と北海道でカーリング組織が発足した。

「東京カーリング・クラブ」（小松誠会長）は、七九年の冬から新宿の住友ビルにある三角街スケートリンクで練習を重ねてきたカーリング愛好者を中心に、昨年十二



東京でのトーナメントに10チームが参加した。

月に結成され、二月十四日には、東京よみうりランドで十チームによる第一回「カナダ・カップ」トーナメントが開かれた。クラブの事務局は、川崎市多摩区高石二番地 ハイデンス二四号、小林宏氏宅。

北海道では、二月八日、北海道カーリング協会（会長森鼻武芳北海道カーリング協会会長）が誕生した。雪と氷に恵まれた北海道では、すでに一九七七年の冬、池田町がとり入れ、その後カナダから専門コーチのウオーリー・ウースリアック氏を招いて各地で講習会が開かれるなど、カーリングが静かなブームを呼んでいた。恒例の札幌雪まつりでは、全道都市対抗カーリング大会、レディース・カーリング大会が開かれ、年々盛り上がりを見せている。

### 日本各地でカナダ版画展

エッチングから写真を使った実験的な製版法まで、カナダの現代版画を代表する版画家十人の作品が、全国各地で巡回展示されている。

この「現代カナダ版画家十人展」は日本在住のカナダ人版画家カストン・ブチ氏が日本の美術館、カナダの版画家に協力を仰いで実現したもので、すでに千葉県、栃木県、北海道で開催されたほか、次の各地を巡回することになっている。四月一日～五月三日 兵庫県立近代美術館。

五月八日～五月二十一日 広島県立美術館。  
五月二十六日～六月四日 福岡市美術館。  
六月十六日～六月二十八日 神奈川県民ギャラリー。

### 米タイム社などが採用 情報サービスの実験に テリドン

カナダ通信省が開発した双方向テレビ情報システム「テリドン」（本紙第二十六号を参照）は、すでにカナダで教育テレビなどに利用されてその優秀性を証明しているが、今度は米国でもロスアンゼルス、タイムズ・ミラー社と雑誌「タイム」や「フォーチュン」などを発行しているタイム社がそれぞれ情報サービス実験にテリドンを採用することになった。

タイムズ・ミラー社はケーブルテレビ、新聞、雑誌などを所有する世界有数のマスコミ企業。同社では、ロスアンゼルス、オレンジ郡の家庭にテリドン・テレビ端末器を設置し、「ロスアンゼルス・タイムズ」などタイムズ・ミラー系列の報道機関を主な情報源に、今年の十月から大規模なビデオテックス実用実験を行なう、という。

テリドンは利用者が自宅や事務所にいながら、セントラル・データ・ベース（情報ファイル）に情報（文字および模様）を送り、情報を引き出すシステムで、タイムズ・ミラー社では銀行業務、切符

の予約、買物などに関する情報サービスを提供する。

一方、タイム社の計画は、今年末、全国の一般家庭向けに人工衛星を使った多重チャンネル・テレビキーストの実験放送を開始するというもので、世界でも初めての試み。多重チャンネルを使うため、膨大な量と種類の情報が利用できる。

実験は当初、タイム社の子会社で米国の二大ケーブル・テレビ会社のひとつであるアメリカン・テレビジョン・コミュニケーションズ社（ATC）のケーブルを利用する。同社では、タイム社をはじめ、全国紙、地方紙、その他の情報網から得た情報を整理して流すほか、情報広告の可能性についても実験することになっている。

さらにカナダの国際電信電話公社テレグロブ・カナダでは、総額およそ四百万ドルをかけた国際データ・ベース計画にテリドンの使用を決めている。このデータ・ベースは最高十万ページ分の情報量を持ち、双方向ビデオ端末器や通常の通信網を通じて世界中のユーザーの利用に供されることになっている。このプロジェクトは今年の中頃に開始され、三年間続けられる予定。

なお、連邦政府はテリドン・システムの技術と市場性を高め、また産業界に貸出すテリドン端末機約六千台を製造するため、今後二年間に二七五〇万ドルを追加投資することになっている。

# カナダの大学教育

筑波大学客員教授  
ジョン・セイウエル



(1)

教育はカナダ最大の産業の一つである。カナダ国民の三人に一人は学生か教師か、あるいは教育関係の官吏であり、教育関係費は年間二百億ドルにも達しつつある。その総額は政府支出の一七パーセントを占めている。

なんといっても初等・中等（日本の高校を含む）教育に大部分の費用がかけられてはいるが、それ以後の教育課程にも三分の一が支出されている。カナダには高校以後の高等教育を授ける教育機関が数多く存在する。特殊な職業訓練学校から多くの学部をかかえた巨大な総合大学まで、その種類も多い。今日では高校卒業生の四〇パーセントがさらに上級学校へ進学するが、これは一九六六年に一八パーセントの進学率だったのに較べると急激な増加である。最も一般的な進学先は大学およびコミュニティ・カレッジとよばれる学校である。コミュニティ・カレッジは州ごとにその性格を異にする。一般的には職業教育と半専門職課程および純学問的課目をミックスした教育が行なわれる。学位取得はできないが、いくつかの州では大学課程の第一ないし第二学年をそこで終えたり、コミュニティ・カレッジでとった単位の一部を大学に移したりできるようにしている。ケベックでは大学に行くすべての学生は二年間、カレッジに出席する義務がある。カナダ全土でいうと、現在百九十のコミュニティ・カレッジに二十五万人のフルタイムの学

生が在席している。

コミュニティ・カレッジは、実務分野を重視しているため、次第に人気が高まっているが、本格的な教育を望む学生たちにとって大学が大きな目標であることに変わりはない。十八才から二十四才までの人口の七分の一が大学に在学している。カナダの全大学にはフルタイムの学生だけで学部が三十五万人、大学院に四万人が在席する。だが、こうしたフルタイムの学生だけが学生なのではない。多くのカナダ人は仕事をしながら大学に通う。こうしたパート・タイムの学生のうち、多いのはフルタイムの職業を持つ社会人で、夜間や土曜日を利用して大学へ出席する。さらには子供が学校に行っている間だけ教室へ出てくる母親たちがいる。多くの大学がこうしたパート・タイムの学生のための特別な学部をもっている。合計するとパート・タイムの学部学生数は十六万五千名、大学院生は二万八千名に及んでいる。

(2)

カナダの大学の歴史はこの国の成立と時を同じくしており、いまだにフランス、イギリス、スコットランド起源の伝統を残す大学もある。（私が五〇年代中頃にトロント大学で教壇に立ちはじめた頃には、教室内で教授は古めかしいガウンを着用し、学寮に住む学生たちもガウンをまとってテイナリーの席についていたものである。）しかし今日の大学の組織は、第二次大戦中およびそれ以後にカナ

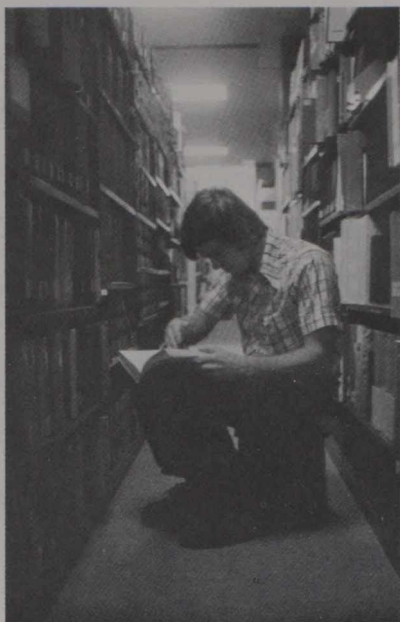
ダ教育界を席捲した革命的な転換によって、まったくちがった様相を示している。一九三九年まではカナダには二十八の大学しかなく、しかもそのほとんどがひどく小さくて活気のない存在であった。最大のもので学生数七千名に過ぎなかったのである。そこへ兵役を終えた若者がドツと帰ってきた。彼らが卒業した後には戦後のベビー・ブーム。これと期を同じくして、生活程度の向上と、教育こそが物質的な報酬と豊かな暮らしを約束する鍵であるという信仰があいまって、大学へ行く子女の数が一気に激増したのである。政府もこれに応えて高等教育に対する巨額の子算を計上し、十九の大学を新設し、既存のものについてはその規模を続々拡大せしめた。今日では六十六の学位取得可能な教育機関があり、そのうち四十七は通常の分類による大学にあたるものである。しかし、同じ大学といっても、その規模は学生数千人の小さなキャンパスから、学生数四万、多くの研究機関、巨大な図書館・試験所を有し、美術館、音楽堂などの完備したマンモス大学までいろいろである。

カナダの大きな大学は、米国の大きな大学と同様「マルチパーシテイ」（総合大学）とよばれることが多い。カナダには日本とちがって特殊な単科大学というものはない。大学にはふつう膨大な種類の講座が学部にも大学院にも設けられており、それらは芸術や自然科学、工学、応用科学、建築、法律、医学、環境、創作芸術、舞台芸術、経営管理および社会

科学などに及ぶ。ほとんどの非公立の研究機関は通常、大学に所属するかあるいは大学と密接に連携しており、大抵はそのキャンパス内におかれている。

(3)

私は日本でよくこう聞かれる。カナダでいちばんいい大学はどこですか、東大や慶応にあたるのはどの大学ですかと。私の答えはいつも同じだ。いちばんいいのもどの分野での話ですか、またどの分野の学生にとってですか。むしろ国際的にも評価の定まった古い大学もあることはある。しかし、本当のよきは学部の質と、その分野における講座の質によるものである。その学科の教授陣は、独創的なすぐれた研究によって一流の学者として認められているか。学生達の知的レベルは高いか、学習意欲は高いか、その



内容は高度であるかどうか。特に大学院課程については、多くの大学の厳密な比較研究による以外、正しい解答は得られないであろう。法律部門で第一位にランクされる大学も、医学部は第十位であるか

もしれず、経済学では三位であっても、ロシア文学ではヒリカもしれないのである。

学部課程に関するかぎり、ほかの国では時おり見つけられるような、トコロテン式に誰でも卒業させてしまったり、低い入学基準とそれよりもっと安易な卒業資格によって大量の学生を集める巨大な私立教育機関のようなものは存在しない。四年間テニスばかりやって遊んでいられるような大学はない。これには多くの理由があるが、なかでも、学園における規範の一切が学部当局の手にあること、そして公立私立を問わず、一切の大学がほぼ完全にその財政を政府に頼っているということが大きい。

(4)

カナダの大学は自治組織である。大学の方針は各学部・学科の教職員および評議会によって決定される。入学・卒業資格の判定は各学部（経済学部など）が行なうのが通例であり、学科（芸術学科、工学科など）ではカリキュラムを決定し、さらに当該学部長の承認を経て教授陣の採用を行なう。学科はまた、俸給および昇進人事についての原案を作成する権限を持っている。組織はあらゆるレベルにおいてかなり民主的に運営されている。各委員会は選挙によって構成され、学部主任から学長まであらゆる管理職は公開の推薦を経て、あるいは若干の投票方式によってのみ任命されるしくみになっている。ほとんどどこでも学生たちはあら

## 私のカナダ留学

原孝一

外国留学は今日もう珍しいものではなくなつたとよく言われる。海外旅行が年々盛んになり、一年に何百万人もの人々が海外へ出るほか、短期の語学留学も海外旅行化してきた現在、学位をめざしての学位留学の本当の生活が、それらのいわゆる「楽しきイメージ」の影になつてかき消されてしまったように思う。僕は別にその「楽しき」生活を批判しているわけではないし、またその立場にいるとも思わない。

しかし数か月間語学留学した僕自身の体験から言うと、自分自身しか自分自身をばる環境にいない場合とそうでない場合とは、その生活ペースが違うと言わざるを得ない。たとえばその生活環境がすばらしい自然と沖に沈みゆく夕陽の輝き、魅力的な街並、次々と行なわれる興味深いフォーク・フェスティバルによって特徴づけられるものなら、ちよつと気のきいた人生を歩もうと思っている人は誰でも、好奇心とカメラを持ってあちらこちら出向いて行つてもしかたのないことだと思ふ。しかし学位留学ともなれば、特に最初の一年は自分かどのようによすばらしい生活環境にあるにしろ、そんな余裕はまずないだろうと思ふ。

僕自身、このすばらしい街、モントリオールに生活しながら、まだその「すばらしさ」を体験したことがなく、知っているのは大学キャンパス、図書館、それに教授のオフィスぐらいのものかもしれない。大学院のコースは一コース（週一

回、三時間のクラス）だけでも、一週間平均二〇〇ページぐらい課題書を読んでレポートを書いたりしなければならぬのでたいへんだ。それにチーム・ペーパー（小論文）を二、三かかっていると、生きている気がしない。英語を母国語とする学生にとつてもたいへんなのに、留学生はすべての面でハンディを負っているだけになおさらだ。それを克服するには大きな情熱とそれを遂行するバイタリティ、それにある程度の知性も必要とされるだろう。多くの日本人学生が海外へ出て学んでいることと思うが、その何パーセントが満足に学位を手にして帰国の途につくであろうか。



中途半端でなく、せひとも学位を取得しようと思つている人は、しっかりと目的のものに、自分に何が欠けているのか、何を留意し、または修得していかなくてはならないか、何を望ましく思ふのか、レポーター作成は自分でできるのかなど、実務的な事も多いかと思われるが、学位留学で苦勞の経験を手で持っている人々に直接教えてもらうのもいいだろう。

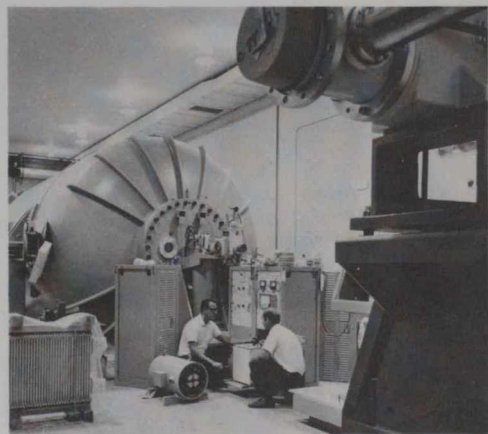
(マック・ギル大学大学院政治学部)

ゆる管理組織や委員会のメンバーに組みこまれている。教授陣の指導能力の評価には学生の一般投票が使われるし、多くのケースにおいて、学部人事の採用、昇進には学生の意向がとり入れられている。

歴史の古い大学の多くは私立の教育機関としてスタートしたものが、ごく最近のものは州政府によって創設されている。しかし実際には両者の間には、大した違いはない。一方で政府は各州立大学には自主管理を認可し、他方今日の私立大学が公共の資金に依存する程度は公立と同じくらいにまでなっている。第二次大戦前の大学は、主として授業料と個人資金の寄付に頼っていた。が、戦後の規模拡大と高等教育に要する費用の急激な上昇は、学生の負担や、法人および校友の援助能力をはるかにこえてしまった。その結果、政府が徐々に高等教育に関する財政上の肩がわりを引き受けることになったのである。今日では経費の八〇パーセント以上——大学によっては九〇パーセントをこえる——を州政府および連邦政府が負担している。

こうして、大学教育に要する費用はぐつと安くなった。何学部とかぎらず、学部学生の年間授業料は八百〜九百五十ドル(約十五万円)、大学院では約千ドル(約十七万円)で、医学部でさえ千二百〜千五百ドル(約二十三万円)ですむ。ということは、カナダの学生は教育費のほんの一部分を負担するだけではないということになる。州によっては、外国からの

留学生に対してはカナダ人学生の倍額を要求するところもあるが、それでもその程度の額では実際の経費に遠く及ばないのである。



(5)

低い授業料と試験による公平な採用によって、大学教育はすべての能力ある者に対してその門を開くべきである。しかし残念ながら、まだ家が貧しく、高校を出ると生活をささげなければならぬために大学へ行く余裕のない学生が存在する。行く気のない者、またその力のない者もいる。しかし仕事をもちながら夜間の講義に出席する者もいる。多くの者は大学に進むが、パート・タイムの仕事を持つているので所定の単位を減らさねばならない。

例えば高校を出て店か工場で働く場合、一週間に三ないし四日間、大学に夜間かよって五〜六年で学士号を取得し、教師

か計理士になるということになる。また一日八時間タクシートの運転手をやるとなると、二科目か三科目分ぐらいしか時間が残っていないことになる。ふつうのフルタイムの学生たちもパート・タイムの仕事を持つ者が多い。夜や週末にタクシールを運転したり、レストランで働いたりするのである。

夏休みには大半の学生が働く。もともと、学生が働けるように、特に父親の農作業を手伝えるように、というのが四か月間の休暇が設けられた一つの理由である。

運のいい者はサマーキャンプで愉快な仕事を見つけたらう。北方の森林や鉱山へ行く者もある。賃金はいいが、重労働だ。しかし多くの学生たちは、働かなければ大学へもどつてくる金が足りない。

親の仕送りの不足分を夏休みにかせぎ出そうという者もいる。また卒業後の自分の本職に役立つような経験のために働く者もいる。

カナダではほとんどの大学の学年は九月から四月までである。これが秋学期と冬学期に分けられる。多くの場合これに

春学期が加えられており、これはふつう夜間コースである。さらにすべての大学の講座を開いている。夏期講習には主として上級資格を取得しようとする教師たちが出席する。しかし今ではもっと広く一般の学生や退職者、外国人学生、語学好きの学生などにも活用されるようになった。ビジネスマンの再教育や管理職むけの経営コースなどさえ設けられている。

大いのカナダ学生にとって、大学教育は就職への第一歩である。はじめから彼らは自分が心に決めた最終目標——教師、技術者、ジャーナリスト、研究者、法律家、医者など——にあわせて科目を選択する。雇用者側も学生に対して、あまり世話をやかなくてもすぐ仕事に入っているくらいにちゃんとした知識を身につけて卒業して行くものと期待している。学士および修士の学生の八五パーセントは自分の専門分野に就職する。むしろ美術のような分野ではこの数字は低く、商業金融関係ではずっと高い。大卒の給料はかなり高い。新卒の学士は、コミュニ

## 私のカナダ留学

飯塚 恭子

七九年八月三十一日に日本をたち、こちらカナダのビクトリアにやってきました。最初の日は、とにかく住む所が決まっていなかったので、大学のハウジ

ング・サービスに行きました。日本からきたこと、親類がないことなどを、かたことの英語で言ったのがよかったのか、日本出発まではことわられた寮に入るこゝができました。寮が開くまでの三日間も、ダウンタウンの近くのアパートに住むことにアレンジしてくれました。次の日は、午前中英語のテストを受けました。最初の一週間が単位の登録期間、体育館

ニティ・カレッジの一年コースの卒業生より三〇パーセント高く、博士号を持つ新卒はふつうの学士より五〇パーセント上まわる初任給をとる。

日本とはちがって、就職先と給料に関して男女の違いはほとんどない。学生のほぼ半数は女性であり、大学でも各学部には散らばっている。カナダの法律は性に基づく就職上の差別を禁じているし、女性には官庁、企業、教育界、ジャーナリズムなどあらゆる仕事で男性と対等に競い合っている。経済専攻の女性学士はエコノミストとしての働きを期待されるのであって、秘書や受付になるのではない。資格が同じであれば、女性は男性とほぼ同額の俸給をもらう。平均の数字は男性の方がやや高いが、これは技術関係や経営管理、法律、医科歯科など収入のよい分野により男性卒業生が多いからに過ぎない。しかもこの状況は急速に変わりつつある。

(6)

教育は州の管轄下にあり、各州はそれぞれ独自の高校卒業資格に関する規定を決めている。高校卒業に要する期間は、ところによって十一年、十二年、十三年と異なる。二十年前にはどの州でも高等学校修了時に全州的な大学入学試験を受けることになっていた。ふつう大学の教授陣が出题し、教授および高校の教官による委員会が採点するものであった。その後、この種の入試は廃止され、今では大学入学は高校側の評価に基づいている。しかし各大学は独自の基準を設けること

ができる。ある大学は入学希望者の平均点がC(可)であれば入学を許可する。ある大学は一定の科目については平均B(良)を要求するであろう。さらに高校卒業さえできればいいという大学もある。

大学における課程がさまざまであるように、当然ながら入学についてもむづかしい大学、やさしい大学の差はでてくる。学生のはほとんどは、自分に適した講座があれば自宅に近い大学を選ぶ。ところが主として経費の点でしかたなく自宅から通う少数を除いて、多くの学生はアパートや下宿、または学内の寮に住む方を望む。学内においては学生は一人前の成人とみなされ、大学側は法律を犯したり他人に迷惑をかけたたりしない限り、教室外での学生の行動に一切干渉しない。また大学当局は学生の政治的社会的活動に對しても寛容である。政治的な集まりや討論は学生生活の重要な一面であるとされる。

ふつう学生は入学当初から、優等課程を選ぶか普通コースにするかの選択をせまられる。前者は通常科目が多く(多くの大学では期間が通常より一年長い)、高い平均点が要求される。どちらをとるにしても、学生は一つないし二つの専門分野を決めなければならない。が日本の多くの場合に較べると、それ以外の分野での選択の自由はずっと広いようである。典型的な学生の場合、学期内または年内に五つの科目をとる。大抵の科目は毎週三時間の講義、ゼミナール、集団討義の組合わせからなっている。どの科目

で科目を選び、教科書を買ひ、それから余った時間はゆつくり過ごしました。二週目から授業が始まりました。五科目、週に十五時間の授業。毎回宿題の出る科目もあり、なかなかたいへんでした。最初の祝日は感謝祭。カナダの感謝祭はアメリカよりずっと早く、十月のはじめごろです。友だちの家へ招かれ、初めて七面鳥を食べました。そして冬休み。寮を出なくてはならぬので、行く先に困っていた所、友だちに誘われ、カルガリーに行きました。バスで二十時間もゆられて疲れたけれども、行くだけの価値はありました。途中でロッキー山脈をこえ、バンフも通り過ぎました。カルガリーではクリスマス、大みそか、元日など、数々の食事を楽しんだり、初めてのクロス・カントリー・スキーをしたり。

二月の下旬に二日間の休み (reading break) があり、土・日と合わせて四日間になったので、モーターハウスを利用してポートランドへ四泊五日の旅をしました。車の中にベッド、冷蔵庫、コンロ、トイレ、シャワーなどがすべてついていて、どこにでも停めて食事を作ったり、寝ることができます。暖房がついているので真冬の旅でもちっとも寒くありませんでした。二学期の授業は四月末で終り、その後四か月以上もある夏休みになりました。私は五、六月にインターセッション、七、八月にサマーセッション(夏期講座)があったので、夏休みはビクトリアで過ごしました。

九月から二年生になり、授業は一段とむずかしくなりました。十二月まで宿題が山のようにあり、毎日勉強に追われていましたので、クリスマスの試験の後にはっきり休養しました。

大学の授業は四か月でひとくぎりになっていて、最初の授業でカリキュラムをもらうとその通りにどんどん進んでいきます。その間に一、二回の中間テスト、



最後に期末テストがあり、配点も中間が一〇〇四〇パーセント、期末が五〇パーセントで、合計で五〇パーセント以上とれないとほとんどの科目ですぐF(不可)がつきます。きびしいけれど、言われたことを全部やれば、落ちることはないと思います。ただ全科目同じように宿題が出たりするので、時間の配分をうまくしないと全科目に手が回りません。

このような状態なのでいつも宿題に追われています。卒業まであと三年程、これからもがんばっていきたいと思っています。

(ビクトリア大学)



においても、学生は学期毎に一つの研究課題を完成させねばならず、さらにその後には三時間にわたる最終筆記試験が待っている。教学、自然科学関係の科目では、毎週あるいは二週間毎に課題が出されるのがふつうだ。このほかに、クラス討論のため読書が毎週課せられる。教室での一時間のために、図書館で三時間の勉強が必要とされる。まじめな学生だと、週六十時間勉強することになる。

カナダでは大学に入学したからといって卒業できるとは限らない。実際多くの場合、新入生の三分の一は二、三年のうち姿を消してしまうといってもいいだろう。ある学生は大学での勉強の厳しさと試験に堪えられない。ある者は、内容を理解する知的能力が不足している。特に上級へすすむに従ってだんだん厳しくなっていくから、どうしてもついて行けなくなるのである。単なる怠け者も当然いるだろう。私の日本での見聞からいうと、学生に要求されるものはカナダの方がずっと厳しいし、教授側もいい加減にお茶をにごそうとはしない。そのうえ、どの

科目をとっても、非常に点の甘い教授でさえAをあげるのはクラスの一〇パーセントぐらいで、ふつうの学生は最低のCで満足しなければならぬ。Cをもらった学生は、優等課程からは脱落ということになる。つまり普通コースの学生、ただ卒業できるだけの学生になってしまうのである。

教授というものはいつでも学生に不満を持っているものだが、一九七〇年代に入って学部学生の質が一般的に低下したということでは誰にも異論はないようである。その理由を見つけてるのはむづかしい。全州規模の試験の廃止である。これによって学力決定の全責任は高校側にゆだねられた。その結果、高校側は生徒の進学をさまたげるのではないかと、いう負担に堪えかねて、評価を甘くしてしまふことになった。一方大学側は必修英語、数学、あるいは第二外国語の修得といった入学条件をひっこめて、副次的な科目をとっても入学させることにしてしまった。大学教育のファッション化、生活の向上に伴ない大学へ行ける階層が増えたことなどによって、意欲や能力のない者までが狭き門におしかけ、能力以上の大学を目指すようになった。脱落する率も高いが、知的水準もぐんと低下した。

しかしヤマはもう見えたと考えられる人々は少なくない。今日では大学も七〇年代中頃のようにポピュラーな存在とは思えない。例えばコミュニティ・カレッジのようにチャンスはほかにいくらでもある

## 日本の大学院生に奨学金

カナダは、日本との協定にもとづいて、それぞれの国でカナダ研究、日本研究に力を入れ、日本と訪問教授を交換しているほか、大学院レベルの奨学金支給、図書館への図書寄贈などを行っている。カナダ側ではまた、カナダで短期間、研究・調査をする日本の学者にも資金援助を始めている。

### 奨学金

このうち、カナダ政府が奨学金を支給している日本の大学院生は、現在十六人。政治学、経済学、社会学、歴史学などを専攻する学生がほとんどだが、言語学、音楽学、海洋学などの研究者もいる。

カナダ政府は、現在十六人。政治学、経済学、社会学、歴史学などを専攻する学生がほとんどだが、言語学、音楽学、海洋学などの研究者もいる。

支給額——毎月五百ドル及び授業料  
期間——一学年（ただし成績によって更新できる）

### 特別研究資金

カナダ政府（外務省）の対日奨学金制度はカナダ文化交流計画にもとづくもので、その概要は次の通り。

応募資格——博士号の所持者で、カナダでさらに研究を続けたい人。芸術家としての活動を続けている人。

支給額——毎月千ドル及び支度金三百ドルと往復旅費。

期間——四か月以上一年以内（更新不可能）

### 研究対象

①芸術、人文学、社会科学の各部門におけるカナダの事象の研究。

②カナダが経験と実績をもつ事象（少数民族教育、二言語主義、多文化主義、海洋法、都市間交通、北方圏環境など）の研究。

③物理学、生物学、工学などの諸科学（医学、歯学を除く）においてカナダの先進性が認められている分野の研究。

応募用紙の請求、その他詳細については、当大使館文化情報部まで。



のだし、多くの分野で大学卒業生が過剰気味になり就職口も減っているようである。従って大学もまた生存競争の場であることがわかれば、志願者たちもそれなりの行動をとるようになるであろう。

(7)

ところで外国人留学生にとってはカナダの大学は天国というわけにはいかない。多くの場合英語が母国語ではないし、英語を話せる者にとっても生活習慣や気候の変化にどう適応するかという問題がある。ある研究によれば、留学生の多くは講義を理解し、参考書を読み、いくつもの長文の論文を作成するなどの学習に多大の困難を感じているという。

教室の外でも障害は多い。かつてはその特権を乱用する留学生が多かった。彼らは入国するための便法として、学生または学生のふりをしてカナダへやってくる。そしてすぐ学校をやめて職につくか、あるいは卒業と同時に就職して姿を消してしまう。そんなわけで数年前から留学生に対する規則はきびしくなった。きびしすぎるほどだといってもいい。

入学希望者はビザを受取る以前にその大学からの許可を得ていなければならぬ。さらに落第または卒業の暁には帰国しなければならない。カナダ国内で働くことは許されない。留学生の妻または夫も同様である。しかし大学院学生の場合には学費支払いのため、または将来のためになる経験として、研究あるいは教育助手のような職をもつことは許されている。

五年前カナダには五万六千人の外国人留学生がいた。それ以来この数が増えていくことはまちがいない。このうち二万五千人が大学に在学している。つまりカナダの大学生全体の五パーセントは外国から来ているということだ。比較のためにいうと、アメリカではその比率は二パーセントである。

留学生の半数以上はアジアから来ている。うち三分の一は香港からで、マレーシア、中国、シンガポールなども多い。日本からも数百人來ている。次に人数の多いのは米国で、約六分の一にあたる。カリブ海諸国からもほぼ同数の留学生が來ている。第三世界からも数千人、主としてカナダの外国援助計画による補助金を得て勉強している。学部学生の留學も多いが、なんといっても魅力のあるのは大学院での研究である。事実カナダの大学院生の五人に一人は外国からの留学生だ。うち三〇パーセントが技術および自然科学関係を、さらにそれと同数が社会科学、経済学、経営学を専攻している。

(8)

大学院教育は、専門学校とはちがって、第二次大戦前はまだ揺籃期にあった。研究施設も図書館も貧弱なもので、博士課程をとるためにはイギリス、フランス、米国などの著名な大学へ行かねばならなかった。しかしこの三十年間で大学の研究体制も大学院の内容も大幅に拡充された。カナダの各大学は今では第一級の講義内容と研究条件をそなえて多くの外国留学生をひきつけている。カナダは経済サミットの一員であると同時に、大学院教育および研究の分野でもトップクラスに属していることはまちがいない。

図に示すように、学生たちは四年間の優等課程の学士号あるいは法学や医学といった職業分野の学士号を得たあと、大学院課程（ふつうは修士課程）へと進む。大学院課程には純理論系と職業・応用部門とある。一九七六年にカナダの各大学で修士号を授与された者は一一、五〇〇人、博士号は一、七〇〇人であった。博士

課程修了者の四分の一が社会科学系、四分の一が教育・人文系、さらに四分の一は工学・応用化学系、そして残りは数学・自然科学となっている。

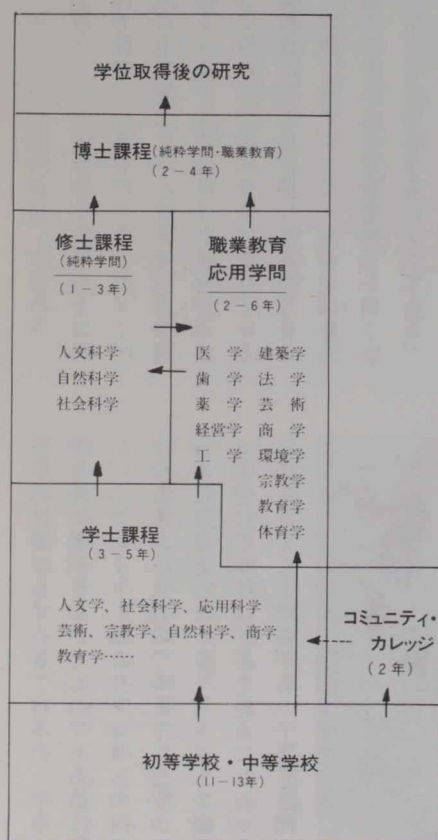
博士号の取得者は一般企業、製造業、政府関係、大学などに就職する。今日では主要大学に安定した地位を望む場合、博士号は当然の必須条件になっている。

(9)

カナダの大学教授はおどろくほど国際性豊かだ。外国出身者が実に多い。イギリス、米国、ヨーロッパ、日本と、先進国、開発途上国を問わずいろいろな国から集まってきている。カナダ人教授の国際的経験も豊かだ。大多数はその研究歴の全てまたは一部をオックスフォード、ケンブリッジ、ソルボンヌ、ハイデルベルグ、ハーバード、エールといった名門大学またはこれらに比肩する他の外国の大学で経験してきたものばかりである。さらに大抵の教授は一つの大学で研究するだけではない。少なくとも二つ、時には三か所の大学に関係するのが慣例になっている。最後にもう一つ、彼らの多くは、大学以外の研究機関でも教えたり、自分のサバティカル・イヤー（通例七年ごと）に与えられる一年間の休暇期間を過ごしたりしているのである。

大学教授の世界は学問思想の世界であり、当然開かれた世界である。組織としてはいろいろな思想に開放されている、ただし、組織の運営自体は閉鎖的にやってもいい、と考えるのは恐るべき幻想である。

### カナダの学校制度



# カナダの 初等・中等教育

関口礼子

カナダにおいては教育は州政府の管轄事項であり、国のレベルでは日本の文部省に相当するようなものはない。したがって、州によって教育制度はまちまちである。バンクーバーの小学校については、先に本誌で紹介されたことがあるので、今回はトロントを含むオンタリオ州の場合を例にとりて紹介してみよう。

オンタリオ州では、学校は、パブリック・スクールまたはセバレット・スクール八年制、セカンタリー・スクール五年制が基本になっている。カトリック教徒は、セバレット・スクールといって別の管轄の学校を設けている。パブリック・スクールの中には六年までしかないところもあるから、その場合はあとの二年間は別の学校に行かなければならない。また、トロントでは幼稚園が発達していて、パブリック・スクールの中に設置されている。他州では、六・三・三制や六・五制、六・二・三制、七・三・二制などが

ある。

カリキュラムの区分は学校区分とは別で、初等教育三年までのプライマリー区分、次の三年間のジュニア区分、次の四年間のインターミディエイト区分、その後の三年間のシニア区分に分かれている。

義務教育は、六歳に達した次の九月から、十六歳に達するまで、あるいは十六歳に達する年の六月末までのうちの、いずれか早い方ということになっている。日本のように義務教育が学年によって定められているのではないので、十六歳の誕生日に達したらその日のうちに荷物をまとめて、「はい、さようなら」と教室を去るケースもあるようである。

カナダの学校運営に関する鍵になることばに「グレード」というのがある。日本の「学年」に相当する言葉である。しかし、「グレード」と「学年」では、考え方が

	在籍数 (1978-9)	学校数 (1976-7)	教師数 (1976-7)
初等・中等教育	5,220,720	13,737	263,680
公立及びセバレット学校	4,310		
海外学校*	179,485	803	9,890
私立学校	34,790	302	1,775
インディペンディアン学校	3,635	26	825
盲・聾学校	n. a.		
職業高校			
高等教育	248,490	186	17,925
コミュニティ・カレッジその他	397,310	67	31,870
大学			

\*国防省がベラルギー、オランダ、西独で勤務する軍人・軍属の子供のために運営している学校。

基本的に異なっている。日本の「学年」が年齢に重点をおいたものであるのに対し、「グレード」はカリキュラムの内容に中心をおいたものである。したがって、毎年毎年与えられるカリキュラムを順調に学習してゆけば、年を経るにしたがってグレードも上がるから「学年」と同じになるが、何らかの理由で学習できなかった場合は、グレードは上がらない。

同一生徒でも、算数はグレード上三だが英語はグレード二、ということも起こりうる。また逆に、成績がよければグレードを跳ぶこともありうる。最近では、こうした各科目の勉強とともに、学校における社会生活という点にも目が向けられるようになってきたので、生徒はなるべく同年齢の者のいる学級の中にとどめておくようにしている。したがって極端に年齢の高い子どもが小さい子たちにまじることなく、また、成績がよくてグレードを跳ぶにしても、全期間を通して一回に限るようである。

こうした多種の生徒が、一つの教室の中でともに学習しうするためには、日本で行なわれているような一斉教授法とは異なる教授法が採られなくてはならない。また、一斉教授法こそが学校教育であるというような考え方も、カナダには存在しない。カナダでは一群の生徒が暗算の練習をしている一方で、残りの生徒は机の上で何か本を書き写している、といった風景も珍らしくない。それぞれの能力と進路に合った学習を行なっているからである。

## 短期経営講座の受講生を募集

カナダ政府から国際ビジネス研究センターのひとつに指定されているウエスタン・オンタリオ大学（オンタリオ州ロンドン）の経営管理学部では、毎年、世界の経営者のための経営講座を設けている。

ひとつは経営幹部のための経営訓練講座で、期間は五週間。もうひとつは国際経営講座（International Management Course）。これは国際市場で起きる経営管理問題に対処する技術を高めるための三週間講座で、多国籍企業など国際的ビジネスにかかわっている企業の幹部が対象になっている。今年の期間は五月十日から二十九日まで。

さて、義務教育は十六歳までで、パブリック・スクールが八年までとすると、どうしてもセカンタリー・スクールに進まねばならない。

セカンタリー・スクール進学は、日本でいえば高等学校進学に相当するものであるが、ここでは試験地獄というような現象はない。入学試験というようなものが存在しないからである。それではどのようなシステムによってこの問題を解決しているのであろうか。

セカンタリー・スクールでは、パブリック・スクールとも異なり、レベルという概念が導入されている。レベルとは学料の難易度で、授業はレベル一から六に、





間に何かを食べる、授業中にガムをかむ先生が話しているのに席を立てて水を飲みに行ったり、ゴミ箱に物を捨てに行くなど、驚かされることが多い。

ともあれ、淳の場合、一才二か月でこのトロントに両親と共に移り住み、家では日本語、外では英語を話す生活をおくっている。フランス語の授業も始まる。本人は、カナダで日本人であることを誇



りにし、大の日本好き。親は、フトロコが痛いのがまんして、二年おきに日本へ夏休みに連れていっているの、日本語もまあまあ。一人っ子のため、甘やかしすぎの気はあるが、学校でも友だちともうまくゆき、成績も悪くない。さて、彼はこれからどんな人になるのかな——と、親バカ丸出して成長を見つめている次第である。

## カナダ大使館新着図書

### ●歴史

- Woods, S. E.** Ottawa: the Capital of Canada. 1980  
**Simpson, Jeffrey** Discipline of Power: the Conservative Interlude and the Liberal Restoration. 1980  
**Finlay, John L.** The Structure of Canadian history. 1979  
**Ujimoto, K.V. and Hirabayashi, G. ed.** Visible Minorities and Multiculturalism: Asians in Canada. 1980  
**Goldstein, J.E. and Bievenue, R.M. ed.** Ethnicity and Ethnic Relations in Canada: a Book of readings. c1980  
**Jacobs, Jane** The Question of Separatism: Quebec and the Struggle over Sovereignty. c1980

### ●地理

- Energy, Mines and Resources Canada** Canada Gazetteer Atlas. 1980

### ●社会・経済

- Industrial Relations Centre, Queens Univ.** The Current Industrial Relations Scene in Canada 1980.  
**Kielty, F. and others ed.** Canadians Speak Out: the Canadian Gallup Polls, 1980 edition.  
**Hagedorn, R. ed.** Sociology. 1980  
**Grayson, J. P. ed.** Class, State, Ideology and Change: Marxist Perspectives on Canada. 1980  
**Ossenberg, R. J.** Power and Change in Canada. c1980  
**Forcese, Dennis P.** The Canadian Class Structure. c1980  
**Forcese, D. and Richer, S. ed.** Issues in Canadian Society: an Introduction to Sociology. 1975  
**Armstrong, Muriel** The Canadian Economy and Its Problems. 1977  
**Rea, Kenneth J., comp.** Business and Government in Canada: Selected Readings. c1976  
**Hiller, Harry H.** Canadian Society: a Sociological Analysis. c1976  
**Penner, Norman** The Canadian Left: a Critical Analysis. c1977  
**Godfrey, D. & Parkhill, D. ed.** Gutenberg Two. c1979

### ●政治

- Elkins, J. and Simeon, R. ed.** Small Words: Parties and Provinces in Canadian Political Life. 1980  
**Dept. of External Affairs** Documents on Canadian External Relations, volume 9 (1942-1943). c1980  
**Van Loon, Richard J.** The Canadian Political System: Environment, Structure and Process. 1976  
**McMenemy, J. M.** The Language of Canadian Politics: a Guide to Important Terms and Concepts. c1980  
**Matheson, William A.** The Prime Minister and the Cabinet. 1976  
**Smiley, Donald V.** Canada in Question: Federalism in the Eighties. 1980  
**Redekop, J. H.** Approaches to Canadian Politics. 1978  
**Hockin, Thomas A. ed.** Apex of Power: the Prime Minister and Political Leadership in Canada. 1977

- Cheffins, Ronald I.** The Constitutional Process in Canada. c1976  
**Bellamy, D. J. and others ed.** The Provincial Political Systems: Comparative Essays. 1976  
**Brodie, M. Janine** Crisis, Challenge and Change: Party and Class in Canada. c1980  
**Bell, David V. J.** The Roots of Disunity: a Look at Canadian Political Culture. c1979

### ●教育

- Munroe, David** •The Organization and Administration of Education in Canada. 1974  
 •Where to Learn French or English. c1979  
 •Directory of Canadian Universities. 1979  
**Adams, Howard** The Education of Canadians, 1800-1867. c1968  
**Byrne, Niall** Must Schools Fail? 1973  
**Martin, Wilfred B. W.** Canadian Education: a Sociological Analysis. c1978  
**Corry, J. Alexander** Farewell the Ivory Tower. 1970  
**Eisenberg, John A.** Don't Teach That! 1972  
**Martel, George, comp.** The Politics of the Canadian Public School. 1974  
**Henderson, Vernon** Peer Group Effects and Educational Production Functions. 1976  
**Cousin, J.** Some Economic Aspects of Provincial Educational Systems. 1971

### ●芸術

- Gingras, Gilles E.** Montréal d'hier et aujourd'hui. c1974  
**Morris, Jerrold** One Hundred Years of Canadian Drawings. 1980  
**Duval, Paul** A. J. Casson, His Life and Works: a Tribute. c1980

### ●文学

- MacLennan, Hugh** Voices in Time. 1980  
**Dooley, David Joseph** Moral Vision in the Canadian Novel. c1979  
**Mandel, Elias Wolf ed.** Contexts of Canadian Criticism. 1971  
**Denham, P. and Edwards, M. J. ed.** Canadian Literature in the 70's. c1980

### ●日本語図書

- 宮沢八郎 「落葉かご」(ソフィア・ブックストア、バンクーバー)  
 佐藤 伝 「感謝の一生」  
 原 道子 「ケベックの街角で」(玉川大学出版会)  
 バーバラ・スマッカー 「六月のゆり」(いしいみつる訳、ぬぶん児童図書出版)  
 モンゴメリー, L.M. 「険しい道、L.M.モンゴメリー自伝」(山口昌子訳、篠崎書林)  
 フライ、ノースロップ 「批評の解剖」(海老根宏他訳、法政大学出版局)  
 大原祐子 「カナダ現代史」(山川出版社)  
 馬場伸也 「アイデンティティの国際政治学」(東京大学出版局)  
 北沢英雄 「新軽井沢物語」(有紀書房)  
 福田常雄 「六十路からの旅立ち、バンクーバー・わが“生体実験”の日々」(現代書林)  
 ポブラ社 「世界の国々に12 カナダ」  
 豊原三治郎 「カナダ商学史研究序説」(千倉書房)

在トロントの旧知の方から、年賀代りにカナダ日系紙の一つである『ニューカナデア』紙の十二月三十日号（一九八〇年特別号）を送っていただいたので、久しぶりに目を通し、いろいろの感慨が湧いた。

私は、けっして日系紙の忠実な読者ではなく、たまたま手に入れば読むというほどの気紛れな読者にすぎない。したがって『ニューカナデア』紙の性格や編集方針が、たとえばライバル紙の『大陸時報』などと比べてどう違うか、といったような点について、私には語る資格がない。ここでは、たまたま手許に届いた『ニューカナデア』の号に即してのみ、雑然とした感想をしるすにとどめた。

英語を読むのに難渋する一世と、同じく日本語を読むのに難渋する二世とを主たる読者にする場合が多いので、どこの日系紙でも、紙面が日本語と英語の二本立てになるものらしい。それも、同じ内容の日本語版と英語版をただ並べるというのではなく、日本語の紙面と英語の紙面とは、内容も編集方針も大幅に違う場合が多い。『ニューカナデア』紙も、日本語版と英語版では、別の新聞という感じが強い。

海外の邦字紙は、一般に活字もレイアウトも文体も古臭く、在外日本人の間では、あまり評価されないのが普通である。筆者の留学時代をふり返ってみても、日本からの留学生や研究者の間で、現地の邦字紙は、あまり問題にされていなかった。

たよりに覚えていた。情報源としても、情報量は一般紙に比べてはるかに少ないので、特別に日系社会に関心のある人は別として、その存在すら知られていなかったのではないかと思う。いまでも、事情はそう変わらないのでなからうか。

私自身、前述したように、日系紙の愛読者ではなかった。ところが、こんど送ってもらった日系紙の特別号を丹念に読んでみて、私は少し自分の考えを改めなければならぬと思った。編集は、たしかに野暮で、お世辞にもあかぬけしているとはいえないが、内容的にけっして水準は低くないのである。日本の巷に氾

## 日系新聞を読む

平野敬一

濫している低俗スポーツ紙や大衆迎合の週刊誌に比べると、はるかにまじめで、レベルも高いことを改めて認識させられた。

内容をみよう。いま手許にある号は、日本語版と英語版とが、それぞれ広告を含めて二十四ページ、計四十八ページもあり、特別号のせいか、なかなかの分量である。日本語版は年老いた一世たちの回顧的記事が多く、問題意識の稀薄さは否めないが、日本事情の紹介や日本映画（この号では「生きる」）の解説など、きわめてまともなもので、日系の老人のために調子を落とすといったコンディセ

ンション（恩に着せるような態度）がないのが気持よい。もっとも、なかにはなんで掲載したのか首をかしげたくなるような独りよがりの文章（日本の留学生の執筆か？）がないわけでもないが。

日本語版に比べると、英語版は、ほとんど問題意識が強く、姿勢も意欲的である。内容は、けっして軽くない。以前、在東京「外人記者」の一人だったメル・ツジ氏の講演要旨が冒頭を飾っているが、これは一読に値する。日系四世になる氏が、なおも遭遇し、見聞するカナダ社会の種類の偏見を鋭く突いたもので、一世や二世の古い世代の日系人が避けて、触れた

がらぬ問題を、ずばり指摘している。テレビや新聞などマスコミ自体が有する偏見の体質や、マスコミに登場して害毒をまき散らす人種的偏見の持ち主が実名でやり玉に挙げられている。これと関連して興味深いのは、やはり同じ英語版に掲載されているトモコ・マカベ氏（サスカチュワン大学）の四ページに及ぶ論文「日系カナダ人の強制移住と二世のアイデンティティ」である。この論文で、氏は日系二世が総じて戦時中に受けた強制移住という理不尽の措置（これこそ人種的偏見の極め付きの例）を問題にすること

意識の外へ放逐したがっている煮え切らない態度を指摘しているのである。してみると、日系の強制移住を人権上許し難い措置として徹底的に資料調査をしたケン・アタチ氏の日系史や、前述のメル・ツジ氏の発言などは、現在の境遇にあまり不満をもたない多くの二世たちにとっては、不協和音として響くのだろうか。いまさら過去をほじくり出してほしくない、という気持は分からぬではないが、新しい移民（たとえばベトナム難民）がカナダの社会で遭遇するに違いない偏見に對しても、目をつむったり口をつぐんだりすることになるのではないか。社会の人種的偏見との戦いで、新しい後続の移民たちが、先輩格にあたる日系社会を頼り甲斐ある盟友とみなしているかどうか、その点が、私にも気がかりである。

英語版で他に印象に残ったのは、トロントの市会議員に選ばれたゴードン・チヨング氏（中国系カナダ人）の講演要旨だった。氏は歌や踊りで人種（エスニック）の特異性を強調する一部の傾向を時代遅れとみなし、それより政治の世界に進出し、カナダ社会のメイン・ストリーム（本流）に入ることの方が肝要、と説いているのだが、若い読者に共鳴するものが多いのではなからうか。

紹介はこれで尽きるわけではないが、英語版には日系社会が抱えているさまざまな問題についての照射があり、読んでいて、うるところが多かった。私にとつては、年頭のいい収穫になった。

（東京大学教授）

## カナダ史点描

# バイキングのカナダ発見

アメリカ大陸に最初に住みついたのは、二、三万年前、すなわち氷河期の終り頃、アジア大陸からベーリング海峡を通じてやってきた、いわゆるインディアンたちの祖先である。

ついで、およそ八千年前には、現在エスキモーと呼ばれている人々が、シベリアから船に乗ってやってきた。

それから何世紀もの時が流れた。そして中世の北欧伝説(サガ)によると、十世紀の終り、すなわちコロンブスが中米のカリブ海の島々(アメリカ大陸ではない)を発見した一四九二年より五百年も前、バイキングが東部カナダに達した。

伝説はこう述べている。時は西暦九八一年の春。まだほの暗いアイスランド東岸の入江から、一艘の船が静かに沖へ漕ぎ出した。乗っていたのは、数人の人を殺したかどでアイスランドにおれなくなったエリック・ラウダ(赤毛のエリック)と彼の部下のバイキングたちである。目的は、北方人によってアイスランドから追われたケルト人やビクト人(バイキングは彼らをウエストマンニと称していた)の住むグリーンランドの南西沿岸。その集落を襲って略奪しようという腹だった。しかし、村にはこわれかけた家の残骸があっただけで、誰も住んでいなかった。赤毛のエリックとその一行は、や

むなくそこでしばらく暮らした後、翌年の春、再び獲物を求めて船を出した。グリーンランドの南端を回って島の西側へ出てみると、対岸に陸地が見えた。そこに行けば自分たちが探していたウエストマンニと彼らの牛がみつかるに違いないと考えていたバイキングたちは、早速船を西へ向けた。——彼らが上陸したのは、おそらくカナダ北方にあるバフィン島のカンバーランド半島であつたらう。

ところが、北極に近いバフィン島には人影はなく、またその寒さはとうてい耐えられるものではなかった。そこで、赤毛のエリックらはヨーロッパで珍重されていたあざらしや北極熊、せいうちなどのキバ、皮、毛皮などを船に積み込んでアイスランドへ帰った。そして当時「大アイランド島」と呼ばれていた島の南部に自らの王国を作ろうと夢見た赤毛のエリックは、その島にグリーンランド(緑の島)という魅力的な名前をつけ、移住者を募集した。九八五年に、およそ一

千人の男女と子供が三十五艘の船に乗ってグリーンランドへ向かったという。その中にはアイスランドで貿易を営んでいたヘルヨルフという男も混じっていた。

ヘルヨルフの息子、ビヤルネ・ヘルヨルフソンは、その頃、ノルウェーからアイスランドへ向かっていた。家へ着いてみると、グリーンランドへ来いという父からの知らせが待っていた。ヘルヨルフソンはすぐにでかけるが、グリーンランド南部を目の前にしながら、北極の強風に押し流されてしまう。霧が晴れた時、ヘルヨルフソンは西に今日のニューファンランドと思われる陸地を目にしている。これが、おそらく、ヨーロッパ人による最初のアメリカ発見であつたらう。ところが、探検家でない彼にとつて、それは何の意味もなさなかった。

一方、赤毛のエリックが建てたグリーンランド居住地では、家を建てるための

木材が不足していた。そこでヘルヨルフソンが南西の地で森林をみたという話を聞いていたエリックの息子レイブは、ヘルヨルフソンと組んでその陸地へ向かう。一行は、平坦な石の地から森林の地へへて、ニューファンランド北端のランス・オー・メドーズ(牧草地の近くの入江)と思われるところに達した。その後、息子の成功に脅威を感じた赤毛のエリックは、レイブが発見したというピンランド(ぶどうの地)を奮い取ってそこに植民するため、トルフィン・カルセフィニというバイキング以下、およそ六〇人の男と五人の女、それにかの数の牛を送る。彼らはニューファンランド北端に二年または三年間滞在したが、インディアンやエスキモーと衝突を繰り返した後、とうとうグリーンランドへ引き揚げて行った……。ピンランドについてはいろいろの説があるが、未だに確定されていない。

ランス・オー・メドーズでは紀元一〇〇〇年頃のものと思われるバイキングの住居跡や炭焼かまど、鉄の加工品、紡錘車などが発見されているし、ケベック北部のアンガバでもバイキングの住居跡が、スベリオル湖の北にあるオンタリオ州ペアドモアでは刀などの遺品が、そして、バフィン島では十三世紀のヨーロッパ人をかたどったエスキモーの彫刻が発掘されている。さらに、一四四〇年頃のものと思われる、ノルウェー、英国、アメリカ大陸北東岸の描かれた地図も発見されている。



10世紀のバイキング船。

# カナダ人の

# 発明発見 (IX)

## ●カーバイドとアセチレン

トーマス(トム)・ウィルソンは、少年の頃から化学と電気に強い興味をもち、天井裏の「実験室」に何時間もこもっては、いろいろな化学式を編みだし、さまざまな装置を作っていた。やがて事故を

恐れた母親から「追い出され」たウィルソンは、ハミルトン(オンタリオ州)のベイ通りとマーケット通りの角にある空地に移り、いくつかの発明をなす。その中にはカナダでは初めてのダイナモ(発電機)とアーク灯があった。そのアーク灯を空地に設置したところ、大勢の人々がためかけ、とうとうダンガン公園に移動しなければならぬほどだった。

これに目をつけた事業家が、ウィルソンにホテルの照明を依頼した。しかし、電燈が点滅したりしてうまく行かず、事業家は契約を破棄してしまった。大借金を抱え込んだウィルソンは、借金返済のために電気化学を使って合成ダイヤモンドを作ろうともくろむ。

ダイヤモンド作りはうまくいかなかったが、その過程で電気化学の知識に磨きがかかり、彼は米国の会社で電気炉実験室の担当となる。ここで特殊なダイナモとアルミニウム抽出法を考案した彼は、

一八九一年にウィルソン・アルミニウム社を創設する。

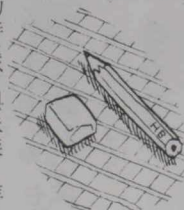
ウィルソンがアセチレンとカーバイドを発見して一躍有名になったのは、その後間もなくしてからのことだった。金属カルシウムを作ろうと、石灰とコールタールを混ぜ、それに三十六ボルト、二千アンペアの電流を流したところ、カルシウム・カーバイドとアセチレンができたのだ。アセチレンは当初照明用に広く使われたが、まもなく酸素アセチレンとして金

属の切断や溶接などに利用されるようになる。アセチレンはまた、船舶用のパイ

や肥料、初期の自動車のヘッドライトにも使われた。また重要な工業原料であるカーバイドは、ウィルソンによって初めて商業化が可能となり、彼は「カーバイドウィルソン」と呼ばれるようになった。ウィルソンは特許権を得て米国の会社(ユニオン・カーバイド)に売り、自分はカナダに帰ってカナダ初のカーバイド製造をはじめた。

## 読者欄

### 音楽家の紹介を



本紙三十三号の人物特集、興味深く拝読いたしました。次回の同様企画には、是非とも小生の好きな音楽界のカナダ人を紹介して戴きたい。小生の記憶に誤りがなければ、オペラ歌手のテレサ・ストラタス、ジョン・ウィツカース(いずれもメトロポリタン・オペラのスター)、またジャズ・ピアノの大家、オスカー・ピーターソンもカナダ人のはず。「バルジ大作戦」で日本でも一躍有名になり、「ジョーズ」、「デュープ」で令名をはせたロバート・ショーは残念ながら故人となってしまうましたが、彼に代わるポピュラーな映画スターは誰かいませんか。ああ、あの人がカナダ人だったのか、という企画を期待しています。

横浜市 山田啓介

### テリー・フォックスさん、頑張ってください

カナダ特集を送っていたのでありがとうございます。私はこの特集を読んでみると、カナダのいろいろなことがわかってとてもうれしです。前々から興味をもっていたので、これからもカナダのいろいろなこと、のせてください。編集部のみなさんががんばってください。それからこの特集にのっているテリー・フォックスさんという人にはびっくりしました。がんのために足を切断したというのにマラソンをするなんて……私にはちよつと想像できません。彼は走ることによって寄付をあつめ、そのお金をがんの研究に提供しました。彼の勇氣、意志には私はおどろくばかりです。私もこのテリー・フォックスさんのような心のもちぬしになりたいです。いつまでも、がんばってくださいることを祈ります。

愛媛県周桑郡小松町 曾我部美佐

## 編集後記

○一月中旬から二週間余り、カナダへ行ってきました。今冬のカナダは各地とも記録的な寒さと聞いて、防寒具に身をかためてかけましたが、訪れる先々、すべて「ここ二、三日はぐつと暖かくなりました」ということで、少々当てがはずれました。冬季にはこのように温度が一時的に上がることがあって、「一月陽気」と呼んでいるのだそうです。

○暖かくなったといっても、北緯五六・四四度のフォート・マクマレーでは零下二〇度、オタワでは零下一〇度にもなりました。オタワではこんな寒さのなかでスケートやクロス・カントリースキーはもちろん、ジョギングをする人も見かけました。室内ですが、カーリングも盛んでした。

○今号は教育特集です。セイウエル、関口、川上各氏の記事から、カナダの高等教育や初等、中等教育の理念や現状をご理解いただけたらと思います。

○日加国交五十周年記念の佳作論文は継続掲載の予定でしたが、スペースの都合上、今後の掲載は見合わせることにしました。ご了承ください。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100東京都港区赤坂七丁目三十三番

カナダ大使館広報部